

(2) 内視鏡科

概要

内視鏡科の人員は医長1名であるが、外科・消化器科をはじめとする他科とも連携をとりつつ消化器内視鏡検査を施行し、疾患の診断ならびに治療を行っている。現在のところ施行可能な内視鏡的治療として、食道・胃静脈瘤の硬化療法ならびに結紮療法、消化管狭窄に対する拡張術、異物摘出術、腫瘍性病変の粘膜切除術ならびにポリペクトミー、消化管出血に対する止血術（局注法およびクリッピング）、総胆管結石除去術、経皮的内視鏡下胃瘻造設術などが挙げられる。

診療活動

2002年3月から2003年3月までの消化器内視鏡検査総数は298件であった。（外科単独での施行例を含む）このうち上部消化管検査（内視鏡的逆行性膵胆管造影を含む）は206件、下部消化管検査は92件であり、一般の病院に比して下部消化管検査の比率が高かった。これは小児期から成人期にわたる多くの炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎・クローン病など）患者が通院しているためである。

月ごとの検査数の推移をみると、夏（7～8月）に多く、これに春（3月）が続く傾向が見られたが、学生の休暇に一致するものと考えられた。また全体の傾向から判断して徐々に増加傾向にあると思われる。

内視鏡的治療では食道静脈瘤の結紮術、消化性潰瘍（十二指腸潰瘍）の止血術（エタノール局注法およびクリッピング）、大腸ポリープの粘膜切除術およびポリペクトミー、食道狭窄に対する拡張術、胃瘻造設術等をそれぞれ施行した。

検査場所別にみると内視鏡室（局所麻酔での検査）が193例、手術室（全身麻酔での検査）が106例であった。内視鏡室で鎮静を用いずに通常検査を受けた患者の最低年齢は、上部消化管で10歳、下部消化管検査では12歳であり、同年代の症例をそれぞれ数例ずつ経験した。これらの患者は、自覚症状も含めて大きな問題もなくスムーズに検査を受けることが出来た。この経験から判断して、上部および下部内視鏡検査ともに、10歳以上の年齢であり、かつ検査の必要性を理解できる患者であれば、成人と同様に通常の内視鏡室での検査が可能であると考えられた。

検査の介助を担当する看護師は当初未経験者であったが、症例を重ねるごとに各種手技・内視鏡検査に関する知識および内視鏡検査を受ける患者に対する心理的サポートが向上し、現時点で通常検査を行うに際して問題のない状況にある。

